

芸術は爆発だ！

世界で活躍した日本の芸術家、岡本太郎氏の言葉です。1981年、ビデオテープの商業で放った衝撃的な一言でしたが、なぜ、このような表現となったのでしょうか。同氏の著書の中では、芸術の三原則として、「今日の芸術は、うまくあってはいけない。きれいであってはならない。こちよくあってはならない。」と主張しています。上手で、美しく、心地よいものではないからこそ、見る人を激しく惹きつけることが芸術の伝えたい本当の凄みだと言っています。

確かに、創作物、絵画、舞台表現、映像作品などの文化的世界は、美、芸、感性といった本来つかみどころがないモノです。しかし、芸術家は、思うように創作できない苦悩を感じつつも、心の内には燃え盛るような作品への表現欲求があるのでしょうか。

また、芸術は、見る側の人によって価値を生み出すため、作品との出会いで心が震えるほどの衝動が起こると言われています。このように、文化や芸術に関わる人、全ての人の中に大きな破壊力を持った影響を与えることをまさに「爆発」と表現したのでしょうか。正体不明のアーティスト、バンクシーによる一見、落書きのように見える風刺的なストリートアートが私たちの心をしっかりと捉えた作品として、その芸術性が評価されているのは、21世紀になった今でも、この岡本太郎氏の言葉で理解ができるのではないのでしょうか。

ところが世の中を見渡すと、私たちが目にするもので心を動かされるものと言えば、怖いもの見たさなどの人の心理を利用した大爆笑、大興奮、大絶景、大絶叫など、想定外や過激なことにしか心へ影響を与えていないことに気が付かされます。非日常的なものにしか反応しなくなった私たちの心には、本来であれば物事の本質を見抜く力はあるはずですが、規模に捉われることなく、感動や感激の体験を大切にしたいものです。

令和6年9月20日から22日まで、夢源をテーマに開催された大成祭は、秋晴れの中、多くの来場者をお迎えし盛大に開催されました。代名詞となったモザイクアートは、昨年以上の見応えのある作品となり、お披露目された瞬間に来場者の歓声があがり目をくぎ付けにしました。

私が日本一の文化祭と誇る理由は、各クラスの企画、作品、そしてパフォーマンスのすべてにおいて、準備での成功や失敗の積み重ねにより、生徒一人一人の力を総和してでも発揮できない成果や価値を生み出し、大成祭そのものを芸術作品として創り上げられているからです。

過激さばかりで感動する時代だからこそ、生徒の夢の源は、大成高校の無限な可能性に火を付け学びの匂いとなって爆発させていました。

